

肺膿瘍を合併した肺腫瘍の犬の1例

○矢吹淳, 小出和欣, 小出由紀子, 浅枝英希(小出動物病院・岡山県)

【症例】

ミニチュア・ダックスフンド, 去勢雄, 10歳6カ月齢。

【主訴と現病歴】

1カ月前から咳があり, 徐々に回数が増えてきており, 疲れやすくなってきたとの主訴で5日前に他院を受診した際に, 胸部レントゲン検査にて右側胸腔内腫瘍の存在を指摘され, 精査および治療を希望し当院を紹介受診。混合ワクチン接種, フィラリア予防毎年実施。

【身体検査所見】

体重10.05kgと肥満(BCS:5/5)で, 体温38.9℃。腹囲はやや膨満しており, 肺音粗励で, 興奮時にチアノーゼを認めた。

【初診時臨床検査所見】

◎血液検査(表1~3)

CBCではPCVの軽度上昇を認めた。血液化学検査ではALPとGGTの軽度上昇を認めた。またAPTTの軽度延長を認めた。

◎単純X線検査

胸部では右側胸腔内に限界明瞭で鶏卵大の孤立性腫瘍を認めた(図1, 2矢印)。腹部では腹囲膨満と胃内ガス貯留および消化管内の連続性ガス像を認めた。また胸部, 腹部ともに多量の皮下脂肪を認めた。

◎超音波検査

右側胸腔内腫瘍の内部は無〜低エコーであった(図3)。腹部と心臓に異常は認められなかった。

【診断・治療および経過】

以上の検査結果より肺腫瘍が疑われ, 入院とし, 静脈内持続点滴, 抗生物質, H₂ブロッカー, 気管支拡張剤, 水溶性複合ビタミン剤の静脈内投与を実施し, 同日全身麻酔下でCT検査と手術を実施した。麻酔はミダゾラム, グリコピロレートの前投与後, プロポフォール静脈内投与により導入し, イソフルランと酸素の吸入で麻酔を維持した。呼吸管理は臭化ベクロニウムの間欠的静脈内投与下でベンチレーターによるIPPVとした。なお術中の鎮痛にはフェンタニルを用いた。単純CT検査では右側胸腔内に限界明瞭で鶏卵大の腫瘍を認め, 造影CT検査では腫瘍内部の造影効果は低かった(図4, 5, 6矢印)。なお肺内転移は認められなかった。この他, 重複後大静脈, 右側腎結石, 第2~4頸椎間および第11・12胸椎間に椎間板の石灰化を認めた。

胸腹部正中切開により開胸および開腹すると, 腫瘍化した右肺中葉を認めた(図7矢印)。腫瘍は鶏卵大で波動感があり, 前葉と後葉に癒着していた。16G多孔留置針にて腫瘍を穿刺する(図8)。矢印は腫瘍と, 約60mlの淡赤乳白色の膿汁が吸引された(図9)。次に癒着を超音波凝固切開装置にて剥離し, 腫瘍のある右肺中葉基部を2-0ナイロンブレードで結紮し切除した(図10)。この後胸腔内と腹腔内を加温生理食塩水で十分に洗浄し, ドレーンを留置して閉胸および閉腹し, 術後の酸素吸入を目的に経鼻カテーテルを留置した。病理組織学的検査において, 切除した右肺中葉の腫瘍は肺細胞癌で, 脈管浸潤はなく, マージンも十分に確保されていた(図11, 12)。また採取した腫瘍内の膿汁の細菌培養同定検査は陰性であった。

術後は麻酔からの覚醒に時間を要したが, 手術翌日には酸素吸入なしで経皮的動脈血酸素分圧は100%, 胸水貯留も5mlとほとんどなかったため, 経鼻カテーテルと胸腔ドレーンを抜去した。静脈内持続点滴, 抗生物質, H₂ブロッカー, 水溶性複合ビタミン剤の静脈内投与とフェンタニルによる鎮痛処置は術後も継続し, フェンタニルは術後4日に終了した。手術3日より食欲が認められ, 全身状態が落ち着いていたため術後7日に抗生物質, H₂ブロッカー, 気管支拡張剤を10日分処方し退院とした。抗癌剤治療はオーナーが希望されなかったため実施せず, 退院後は紹介元病院での検診を指示した。本症例は退院後, 経過良好に推移していたが, 術後6カ月に急性膵炎による頻回嘔吐が認められ, 紹介元病院で治療を行ったが, 死亡したとのことであった。なお術後6カ月時の胸部レントゲン検査では, 再発や肺転移を示唆する所見は認められなかった。

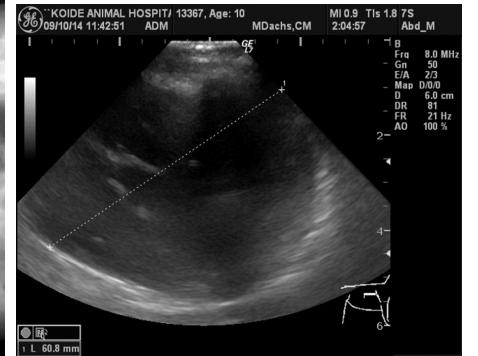
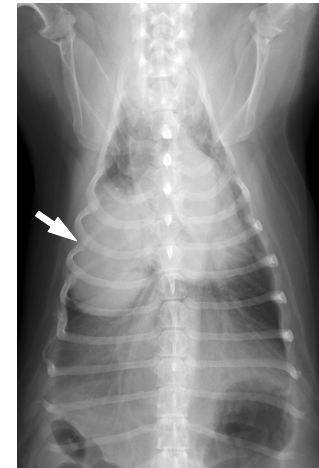


図1 胸部X線写真(DV像)

図2 胸部X線写真(LL像)

図3 超音波検査(胸腔内腫瘍)

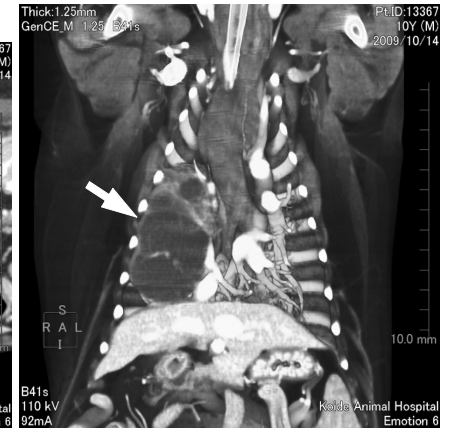
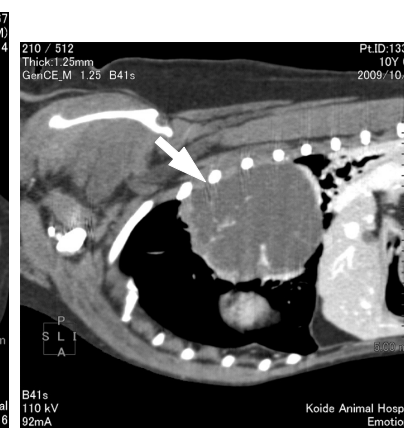
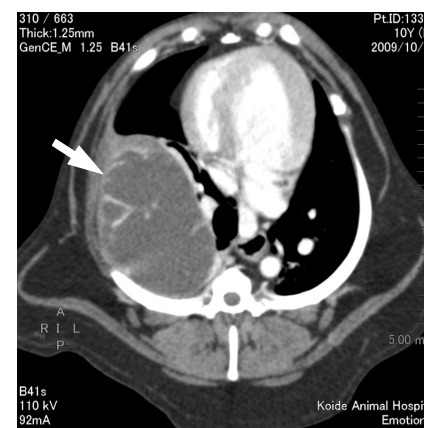


図4 胸部造影CT検査(アキシャル)

図5 同(サジタル)

図6 胸部造影3D-CT検査(VD)

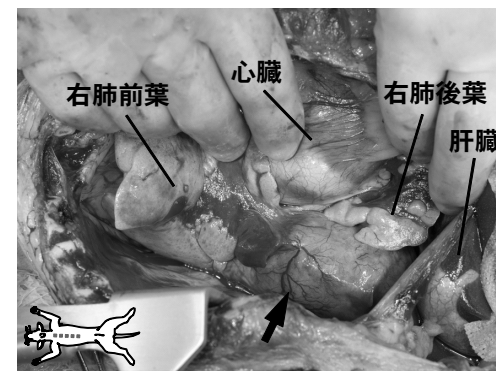


図7 術中所見①

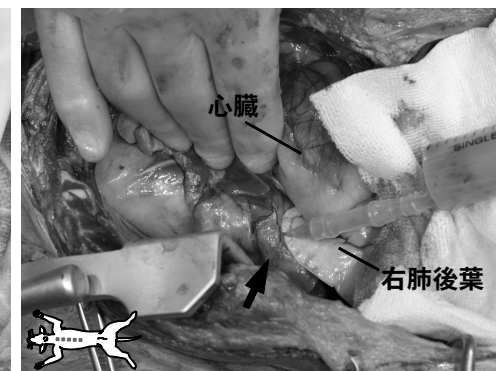


図8 術中所見②

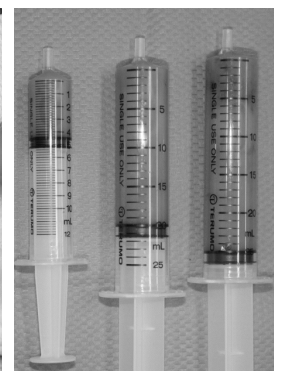


図9 採取した膿汁

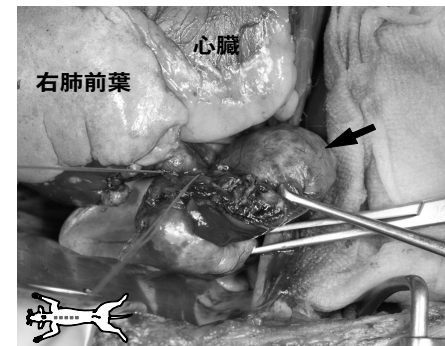


図10 術中所見③

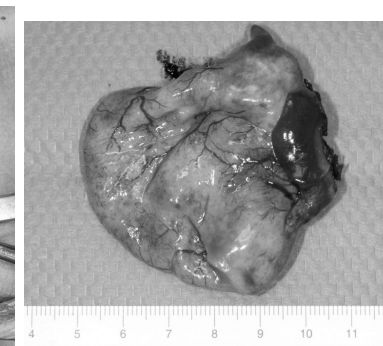


図11 摘出した腫瘍

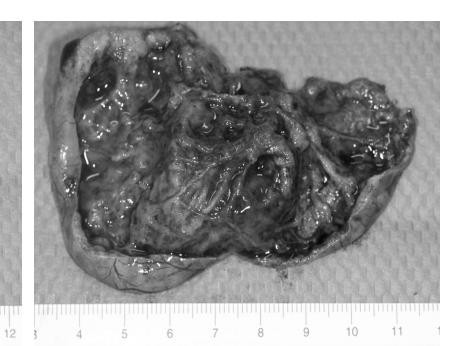


図12 摘出した腫瘍の剖面